

資料番号:052227 「南極観測船(含む ART 関係)」関係資料 「資料の説明」

- * 南極観測船は幅が広いために動揺が大きいこと、氷海中の行動に Bilge Keel が不向きなことなどの理由により ART が必要である。このため東大に協力を依頼したと思われる。
- * 海上保安庁の船は波浪中の救難作業、浮標の設定など停止状態で作業を行わねばならないケースが多いことから ART などの減揺装置が必要とされる場合が多い。
- * 歴代の南極観測船は次の通り。
 - 「宗谷」 1956 第1次～1965 第6次
 - 「ふじ」 1965 第7次～1982 第24次
 - 「しらせ」1983 第25次～2008 第49次
 - 「しらせⅡ」2009 第50次～この資料群の対象船は主として「ふじ」である。ごく一部に宗谷、初代「しらせ」を含む。
- * 初代の観測船は耐氷型貨物船として 1938 年に建造され、海上保安庁で灯台補給船として使用されていた「宗谷」を改造して充当した。宗谷の灯台補給船としての任務は「若草」が引き継ぎ、この若草の任務:電波機能等測定を担う代船が三井・玉野にて建造された。第 1072 番船”つしま”である。この船の ART に関する資料も含まれている。
- * 宗谷の後継船「ふじ」が就役している時期(1974年頃)にもう1隻の南極観測船が日本鋼管で計画されていた。これが D.No73843「宗谷代船」と称されていた。宗谷よりは大きい「ふじ」よりは小さい船であるが、実現はしていない。この計画船の ART に関する資料も含まれている。
- * 資料に「音響測深機送受波器の減傾」に関するものがあるが、これは測深音波を船体の動揺中でも海底に対し垂直に保つための研究である。

以上